

わたしの京都

河野裕子

曲水の宴—上賀茂神社

今年の曲水の宴は、四月八日であった。穏やかに晴れ、桜の美しい日となった。上賀茂神社（正式には賀茂別雷神社）には広い芝生がある。それは一〇九三年から続いている競馬の神事のために千年の間守られてきた芝生なのだ。この芝生に二本の見事な古木の枝垂れ桜がある。境内の手前にある方が古い。いったい何年の樹齢をもっているのだろうか。京都にも何本とない木で風格がある。この枝垂れ桜をはじめて見たとき、文字通り息をのんだ。今年も曲水の宴の日に、ちょうど満開となり、ゆつたりと花枝を垂らしていた。

上賀茂神社の曲水の宴は、今年で八回目になる。第一回目は、平成六年であった。一回目は、何もかもが初体験で印象が強烈である。何といつても、化粧と衣裳。宴の始まる四時間ちかく前から準備室に入り、化粧をしても

らったり、髪をつけてもらったりする。水白粉を刷毛で顔に塗ってもらうのだが、これが何とも不思議な経験で、ほんとうに顔中まっ白のバリバリになる。顔の凹凸もなくなり、唇だけが紅く、ここに長い束髪（人毛なのだそう）を背中にも垂らしてもらうと、自分が何者かわからなくなる。初めての時は、橙黄色の小桂を着せてもらったが、毎年衣裳の色と紋様が変わる。これがたのしみのひとつで、今年も、萌黄色の地に紅の藻勝美の紋様の衣裳を着せてもらった。

小桂の下は、白の着物に緋色の袴である。紅い緒のついたわら草履をはき、扇を手に持つと形が整う。隣室では葵祭りの斎王代の支度をしているのだが、斎王代の衣裳も化粧も南登美子さんが毎年担当しておられ、歌人たちの着付けは、黒田装束司さんのお世話にな

る。曲水の宴に奉仕するまで、私は装束司という存在を知らなかった。今の代の黒田勝也さんは装束司として十八代目、初代は室町時代に遡るといふ。曲水の宴は、斎王代や歌人たちが主役のように思われがちだが、ほんとうの主役は、伝統を守って黙々と裏方を務めておられる美容、着付、装束司の方たちなのだ。という実感は私にはある。

男性の歌人たちは、衣冠という装束を身に着ける。袍の色は決っていて、黒、赤、緑。私には、女性の小桂姿よりも、男性の衣冠姿の方が形もよく立派に思われる。今年の赤の袍は、正確にいうと、蘇芳色の地に、輪なし唐草紋様だといふ。

曲水の宴は、神社の庭園渉溪園で行われるが、そこまで宮司を先頭として行列をして歩いて行く。神社の北側に神山の、こんもりと

した姿が見える。神山を見あげるたびに、式子内親王の

ほととぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空ぞわすれぬ 『新古今和歌集・雑』

を思い出す。「いつきの昔を思ひ出でて」と詞書があるように、式子内親王は、上賀茂神社に齋王として仕えていたのである。

華やかな古代の衣裳で行列をして歩くのは面映ゆくもあるが、自分が別人になったつもりで歩くのは悪くはない。行列はやがて、櫛の小川を渡る。藤原家隆が、

風そよぐ櫛の小川の夕ぐれはみそぎぞ夏ものしるしなりける 『新勅撰和歌集・夏』

と秋の気配漂う夏越の祓を詠んだ川である。傍らの歌碑を見ながら行列について歩く。

曲水の宴のある渉溪園につき、七人の歌人たちがそれぞれの座に座る。木洩陽が揺れ、時々桜の花びらが散ってきて、目の前の曲水を流れてゆくのを眺めながら、雅楽の音を聞いていると、いつも私は、不思議な時間感覚に襲われるのだ。遠い古い時間を遡ってゆく。小桂の袖を気にしながら短冊に歌を書く。初めの頃は、細字が書けなくて困ったが、この頃はや々と馴れた。やがて、水干を着た二人の童子が竹ざおで操る羽觴（鳥の形の酒盃）が流れてくる。お酒をいただく。冷泉家を中心にした披講（歌の詠みあげ）が始まる。こうした一連の手順をふみながら、遡ってゆく古い時間。そしてそれが今、ここに流れているような感じ。古い時間が、地続きに感じられ、それが違和感なくふつうの感覚として身体に入ってくるのだ。

曲水の宴では、毎回趣向を変えた歌題が出されるが、今年は「春の祝」であった。年によって歌の出来不出来があり、また現代短歌を作るときのような言語感覚の歌は、披講のリズムに合わない。おのずと「和歌」めいた歌になってしまうのは仕方ないことだろう。今まで「社頭の春」、「新樹」、「五月雨」などの歌題が出された。去年は「野の遊び」だった。曲水の宴ではどうしても桜の歌を詠みたくなる。境内の古木の枝垂れ桜の咲く時期と重なるからである。第二回目（平成七年）のときは「春の水」という歌題のもと次のような歌を作った。

いちまいの光となりし水の面に影さだまらず桜散りをり

（かわの・ゆうこ「塔」選者）